

活性化へ5年で90事業

樽商大「拠点整備」の成果発表

小樽商大は2013年度に文部科学省に採択され、本年度が事業最終年度となる地域活性化事業「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の成果発表会を20日、市民センターマリンス

ホール(色内2)で開いた。ホール(色内2)で開いた。パネルディスカッションも行い、地域の企業経営者や市職員らが同大に求める役割などを討論した。5年間で90の事業を実施。北前船を観光資源とし



仁木町の国際フランチング戦略についての取り組みを発表した小樽商大の学生

ていかすため、小樽・後志地域と北前船の関係を紹介する冊子を教員が制作したり、学生も仁木町の国際フランチング戦略を考えるため仁木町に泊まり込みで資源調査をした。職員も後志地域でシールラリーイベントを企画するなど、教職員、学生が一体となって地域活性化に取り組んだ。

発表会には市町村職員や小樽市民など、約100人が参加。江頭進副学長は「(COC事業により)地域に目を向ける研究が増えた。地域と関わる科目は5年で約25倍になった」などと成果を説明した。

パネルディスカッションでは、5人がパネリストを務め「商大は地域の大学になったか」をテーマに討論。光合金製作所(小樽)の井上一郎会長は「小樽商大があることで海外の学生がインターンシップに多く来てくれている」と指摘。市総務部企画政策室の安部俊克主幹は「商大生には小樽を故郷と思ってもらい、将来小樽のまちづくりに関係してもらいたい。小樽に還元してもらえそうな仕組みを今後つくりたい」といけい」と行政としての課題も語っていた。

(徳留弥生)

赤旗 30年2月22日

身近に感じる多喜二

北海道小樽で講座開く

北海道小樽市の小樽「転形期の人々」地区の人々」などで数回、多喜二は小樽をどう描いたか」と題した講座を市内で開きました。

小樽商科大学の荻野宣士夫特任教授が講演し、実行委作成のガイドマップ『多喜二と小樽』も参考に、日本共産党員のプロレタリア作家・多喜二の生涯や人となりを紹介。参加者が多喜二作品を朗読し、描写について荻野氏が解説しました。

「多喜二を身近に感じられました」というのは市内に住む60代の女性。「小樽に住めば住むほど多喜二の描写が納得いきます。写真

で見る彼は生き生きと迫ってきました。多喜二が冗談を言う、人に好かれる好青年だったと初めて知りました」と話します。

札幌市の男性(68)は「話を聞いて、また多喜二の作品を読み直したいと思いました」と語りました。